

自己評価報告書(最終報告)

報告者

社会系コース／齋木 哲郎

■平成25年度の目標に対する自己点検・評価

I. 学長の定める重点目標

I-1. 教員養成大学教員としての授業実践

中央教育審議会は、「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について」答申したが（平成24年8月28日）、その中で「教員を高度専門職業人として明確に位置付ける」と提言している。この答申の考え方を実現するため、教員養成大学に籍を置く教員として、将来、教師を目指す学生に対してどのような授業実践を展開すればよいか。あなたの取り組みを、①授業内容、②授業方法、③成績評価の三つの観点から示してほしい。

1. 目標・計画

教員をめざす学生達に高度の専門性職業人としての職能を獲得させるためには、それなりの倫理観を持たせることが必要である。本学執行部が犯罪に明け暮れし、善悪の区別が付かなくなっている現状では、肝に銘じておく必要がある。そのために、出来るだけのことはやる。次に、授業実践を通じて、私が高度専門職業人としての学生を養成する手段である。①の授業内容については、高度の認識力を養うものであって分かり易い授業、具体的に言えば、学会水準の内容も盛り込んで教育と研究の融合も図り、それによって高度専門性を担保し、かつ受講生にとっては容易に理解できる授業をめざす、ということ。②の授業方法は、教授する内容が学生にとっても身近な問題として理解され、私の語り口や授業の展開の仕方が受講生達の授業に応用されるような形態を示す。③の成績の評価は、出席・レポート・試験により、レポートと試験に関しては、評価の重心を、文章の論理性に置く。というのは、本学学生の傾向として、解答を箇条書きにして、そこに何の論理性も認められない場合が圧倒的に多く、およそ高度の名に相応しい教員の育成が望めないからである。以上のようにしたい。

2. 点検・評価

まず、倫理観の喪失である。一度大学運営に犯罪を導入してそこから抜け出せなくなったというのが現状であろう。司直の捜査によって誤りが是正され、本来の大学の姿に戻ることを期待したい。また私もそのように努力してきた。①授業内容については、ほぼ予定通りに進められた。問題は受講生の中に「自分は初等ないし中等の学生だからそこまで知らなくていい」と思っていた学生が居たとである。小さな教員ではなく大きな教員にするにはどうすべきか、考え直す時期に来ているのかもしれない。②授業方法についてはうきうき。私自身が対話舎となって問題の核心を受講生に語り出すというのは、彼等の日常会話での理解と同様、受け入れられやすかったのであろう。学生達には記憶にも残ったようである。③成績評価は試験と出席状況で出した。試験では私が黒板に記したことの引き写しで用いられていた。学生達には論理性を重視すること常々いっていたのだが、それはとんとおこなわれなかった。自分の意識で捉え直すとか、自分の言葉で語るということにまだ自信が持てないのだろうと思う。この点の解決は次年度以後も課題としたい。

Ⅱ. 分野別

Ⅱ－1. 教育・学生生活支援

1. 目標・計画

授業上の活動以外、学生達の日常生活に於いても力になれることには支援を惜しまぬつもりである。特に留学生からの相談や、彼等の日常生活に於ける不安の解消には、これまで通り、力を尽くしたい。

2. 点検・評価

授業は勿論、授業以外でも、学生達の力になれたように思う。特に留学生からは言葉の面での支援も求められた。中間報告にも記したように、授業の中に中国語による説明を付け加えたことは、予想以上に彼等からの好評を博した。そうであれば、それが他の受講生の妨げにならない限り、今後も続けてゆきたいと思う。

Ⅱ－2. 研究

1. 目標・計画

近年開始した、後漢の儒教研究を、『後漢の儒学と春秋』という形に整備し、纏め上げるまでに至りたい。そのために関係する諸領域、許慎や鄭玄の儒学にまで研究を進めたい。

2. 点検・評価

何休と鄭玄の春秋学論争を伝える鄭玄の『発墨守』『箴膏肓』『起廢疾』を翻訳する。「鄭玄と何休の『春秋』論争—『発墨守』『箴膏肓』『起廢疾』を中心として—」(1頁当たり1600字×16頁)(前年度からの継続)、「許慎の『五經異義』について」(1頁当たり1600字×13頁)」を完成させている。「先秦・秦漢期における春秋左氏伝の展開(仮題)」(1頁当たり1600字×33頁まで完成)現在執筆中である。『後漢の儒学と春秋』の主要な部分は完成しつつある。

Ⅱ－3. 大学運営

1. 目標・計画

大学の犯罪化を防ぐ。

2. 点検・評価

本学の犯罪の特徴は「被害者に対して加害し、犯罪者を優遇する、犯罪者のための大学運営となっている」ことであろう。犯罪を止めるよう幾度と私は一被害者の立場から一提言してきたが、これまで、そして今も止むことはなかった。そうした中で、私は自分に向けられた犯罪だけを司直に訴え、大学の犯罪化を防ごうとしてきた。こうした努力が報われる日がくるのかどうか心許ないが、それを信じてこれまでの活動を継続したい。

Ⅱ－4. 附属学校・社会との連携, 国際交流等

1. 目標・計画

地域連携委員の一人としてその職責を果たしたい。
日本道教学会・中国出土資料学会委員としての職責を全うしたい。

2. 点検・評価

日本道教学会の理事、そして中国出土資料学会の理事として与えられた職責を果たそうとした。けれども、暴漢に遭遇するケースもあって、特に後半は学会にも参加できず、その責務の全てをこなすという所までは行かなかった。
思いがけず、韓国の国立慶尚大学校の教授、全丙哲という方からメールが入り、私が本学研究室から刊行した『春秋胡氏伝通解稿(上・下)』の寄贈を求められた。この本は『春秋胡氏伝通解稿(中)』と併せて三冊からなりB5版全963頁に及ぶ大冊である。全氏によると、この内『春秋胡氏伝通解稿(中)』だけが韓国の高麗大学校の図書館にあって、既にコピーした。『春秋胡氏伝通解稿(上・下)』もどうしても欲しいから寄贈して欲しい、とのことであった。私はこれらの本を韓国の研究者や研究機関に寄贈したことはないのであるが、それがなぜ高麗大学校にあるのか、不思議に思ったが、国際交流にも繋がろうとの思いも手伝って、全氏には要望された2冊を送ってあげた。日韓の友好に役立つことを願う。

Ⅲ. 本学への総合的貢献(特記事項)

特になし。